

「新潟県都市緑花植物園（仮称）」を核とした都市づくり構想

A Sketch of City Planning for Niigata Prefectural Botanical Garden

松山 雄二*

By Yuji Matsuyama

はじめに

『花と緑の劇場』づくりをコンセプトとし、「花と緑の『舞台』づくり」、「花と緑の『コミュニケーション』づくり」、「自然景観による『雰囲気』づくり」をテーマとした今までの植物園にない新しいタイプの「新潟県都市緑花植物園（仮称）」（以下「県植物園」という）の整備が進められている。

また、都市づくりの視点から「県植物園」は、周辺施設との連携、地域の緑のポテンシャルを最大限いかした計画、持続可能でいき続けられる地域経済との関係など「県植物園」を核とした都市づくり構想の具体化について検討されているところである。

この新しい都市づくりは、構想の域を出ないものであるが、関連する植物園や美術館や埋蔵文化財センターや石油の里、そして秋葉丘陵の自然歩道（＝こもれびの道、縄文の道）など多くの施設は既に整備されており、計画段階の新潟薬科大学等も既にその立地は決定されており、構想段階から現実的なものとなってきている。

新潟県のいままでの施設づくりにおいて、施設と都市との関係や周辺施設との連携などを具体的な形で計画化することは、殆どなかったことである。

「県植物園」という一つの都市施設のあり方の追究をとおして、今後の都市づくりを考える。今回の「県植物園」を核とした都市づくり構想は、今後の施設づくり・都市づくりのあり方を示唆する一つの試みとして提示するものである。

1 新潟県が目指す新しい植物園像

(1) 『花と緑の劇場』づくり

植物園には、いろいろなタイプの植物園がある。「県植物園」はその名の示すとおり、都市緑花の普及・啓発を主たる目的としつつも、下記に示すように『花と緑の劇場』づくりをコンセプトに

- (a) 花とみどり人間との関わり方を大切にする
- (b) 雪国であることを意識し、通年花と緑に囲まれた憩いの場とする。
- (c) 緑化の推進に合わせ「花化」の展開を同様に重視する。
- (d) 環日本海の中核都市として国際交流の一翼を担う
- (e) 既存の都市緑化植物園の理念は受け継ぎ創造型へ転換する。

を新潟県が目指す植物園の活動テーマとしている。ここには今までの植物園にない、コミュニケーションづくり、レクリエーションの場、緑化と共に花化等々をテーマとするとともに、環日本海の中核都市としての一翼をも担うことを植物園の活動テーマとしている。

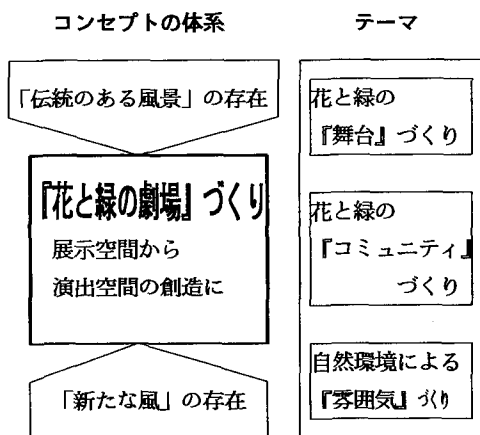
植物園は、植物の種類・本数が多くある。多くの植物を見せる。植物の知識を広げる。植物の研究をする。植物園は博物館。といった植物園の基本的な機能だけのものが多かっただけに、「県植物園」は地域の特性と植物の持つ魅力をいろいろな形で演出することによって、いろいろな分野・階層の方々から、植物及び都市の緑化に関する普及啓発に努めることとしている。

ただ、こうした植物園づくりを目指すには、当然のこととして、都市づくりの視点からの植物園づくり・活動が求められており、現在、そのためのいろいろな取り組みが行われている。

キーワード：都市づくり、植物園

*新潟県土木部都市整備局都市計画課公園緑地室
（新潟市新光町4番地1 TEL 025-285-5511,
FAX 025-285-0624）

新潟県都市緑化植物園のコンセプト



(2) 「県植物園」が目指す新しい植物園像

ー『越の森ミュージアム（仮称）』構想ー

(a) 地域の緑のポテンシャルを最大限生かす

「県植物園」が位置する新潟市の秋葉丘陵は、標高200メートル以下の緩やかな丘陵地であり、昔は薪林として利用され、今日まで二次林としての素晴らしい自然が保全されており、植生も豊かで800種をこえる植物が確認されている。これは暖地系の植物と寒地系の植物が混在していることによる。「県植物園」では、この秋葉丘陵の持つ緑のポテンシャルを最大限いかした植物観察会等の植物園活動を展開することとし、自然豊かな秋葉丘陵を「県植物園」のフィールドと位置づけることとしている。

(b) 花き園芸の生産地に相応しい植物園活動の展開

「県植物園」が位置する新潟市を中心とする地域は、全国でも有数の花き園芸の生産地である。その意味からの「県植物園」の役割は大きい。花き園芸生産者との連携による品種改良、販路拡大、そして全国有数の花き園芸生産地に相応しい花や園芸に関する調査・研究及び情報の提供等の重要な役割がある。また、四季を通して「県植物園」をセンターとした『園芸祭り』等の催しなどの展開も重要なことである。植物園あつての花き園芸の生産地として、地域の活性化に貢献すると共に、質の高い花き園芸に関わる活動を展開する必要がある。

(c) 文化・教育活動の展開

「県植物園」に隣接して「新潟市美術館」と「新潟県埋蔵文化財センター」が整備されている。さらに少し離れたところには「石油の里」が整備されている。また、八幡山遺跡公園、新津森林文化村、さらには全長約30kmにもおよぶ秋葉丘陵の“こもれびの道＝縄文の道”と言われる遊歩道が整備され、市民の絶好の自然散策路となっている。これらの施設はお互いに連携することによって、より生きた文化・教育活動が展開出来るものと考えている。

花や緑の持つ魅力は、人々のくらしに、文化・芸術の世界に素晴らしいものを築いてきました。ポタニカル・アートの世界、遺跡や森林がもつ人々の暮らしや環境との関わりについて、隣接する美術館、埋蔵文化財センター、森林文化村との連携によって今までの植物園ではなかった素晴らしい世界を提供してくれるものと確信している。

(d) 地道なアカデミックな植物の調査・研究

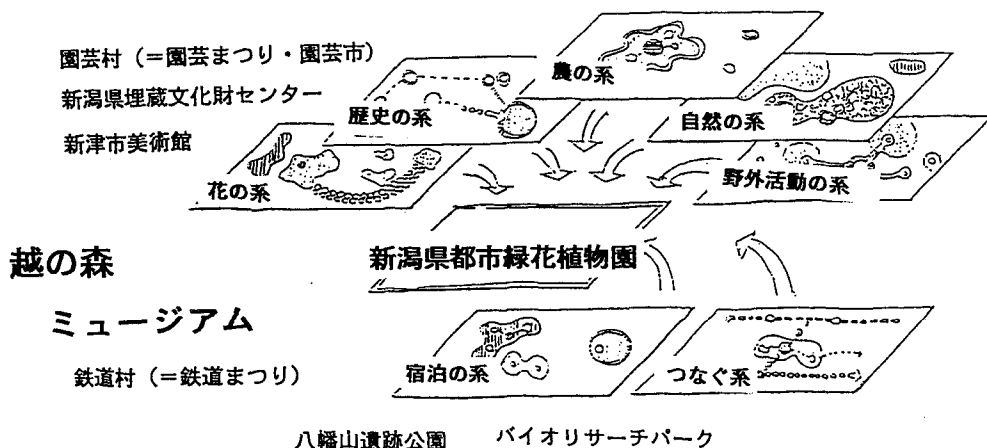
植物園の活動で何と言っても大切なことは、地道な調査・研究であると考えている。幸い秋葉丘陵の麓新潟薬科大学の設置が決まり、薬草園の整備やバイオの研究等々、植物に関わる調査研究が行われることとなる。また、新潟大学をはじめとする県内の植物研究家の協力を得ながら植物に関する調査研究をしっかりと位置づけることとしている。

さらには、新潟県が全国的にも非常に植物の豊富な県であるという、植物園としては非常に恵まれた条件を最大限生かすことが今後の植物園活動の最も重要なことと考えている。植物の研究者はもちろん植物の研究を志す学生たちが一度は訪れなければならないような植物園づくりを目指すことも重要な課題である。

以上、見てきたように「県植物園」では、周辺の実美術館、埋蔵文化財センター、石油の里、新津森林文化村、新たに設置される新潟薬科大学、そして秋葉丘陵全体を含めたエリアを『越の森ミュージアム（仮称）』と位置づけ、新しい植物園づくりを目指しているところである。

こうした活動の展開は、さらに新潟都市圏の都市づくりのあり方についても新たな取り組みを提起することとなっている。

“越の森ミュージアム構想”の概念図



2 「県植物園」を核とした都市づくり構想

この都市づくり構想は、「県植物園」という一つの施設のあり方の追究が生み出した都市づくり構想といえる。

前段で「県植物園」の計画から実施に向けての流れで分かるように、計画の当初の段階では、『越の森ミュージアム（仮称）』構想が考えられていたわけでない。「県植物園」のあり方を追究するなかから、隣接する美術館・埋蔵文化財センターとの連携や「県植物園」のフィールドとしての秋葉丘陵の位置づけや秋葉丘陵に整備されてきた“こもればの道＝縄文の道”を活用した植物観察会等々、具体的な植物園づくりが提起されてきたところである。こうした活動の展開は、植物園のあり方だけにとどまるのではなく、新潟都市圏の都市づくりについても新たな取り組みを提起することとなった。

(1) 施設のあり方からの都市づくりの視点

近年、新潟県内でも立派な文化会館等を目にするようになってきたが、見聞するところによると、目標としていた利用や運営が出来ないところが多いと聞く。かえって財政的な負担や利用率の低さなど問題を抱えているところが多い。

これには、施設をつくるのが目的で後々の利用

や管理・運営について十分な検討がなされないところに大きな原因があると思われる。さらには、施設のあり方を徹底的に追究する。都市づくりの視点で施設のあり方を考える。こうしたことが欠如していたところに最大の原因があると思われる。

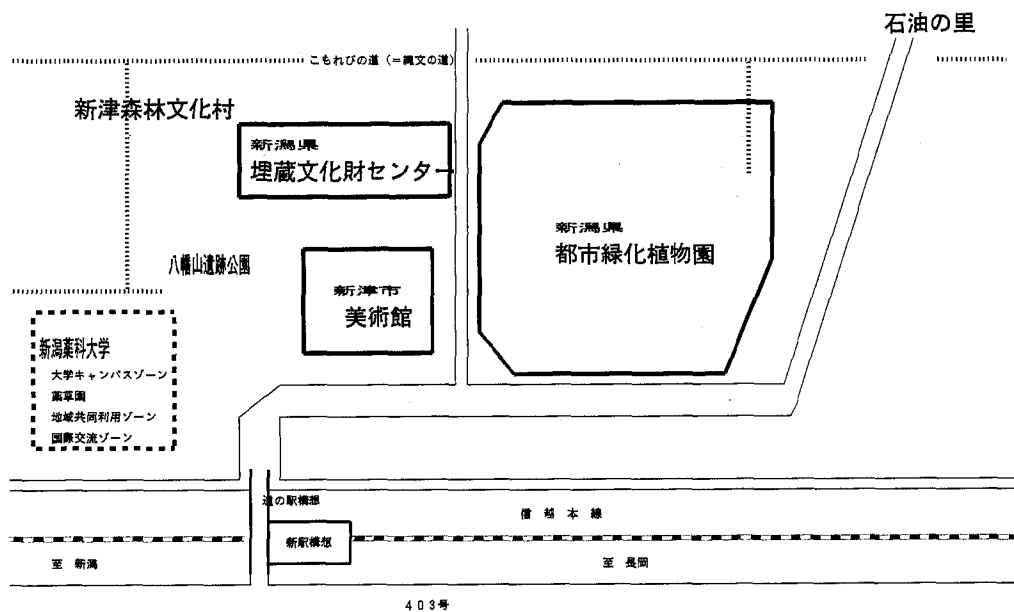
「県植物園」は、今までの植物園にない新しい植物園づくりを目指し計画され注目されているところであるが、基本的には同じである。

周りの美術館、埋蔵文化財センターとの関係や秋葉丘陵を「県植物園」のフィールドとする考え等当初の計画段階では、こうした都市づくりの視点の位置づけが弱かったように感じている。

また、施設づくりで大切なことは、常にフィードバックする姿勢をもつということである。物づくりの世界で、時々耳にする“デザインの熟成”という考え方がある。それは最初の段階でイメージしたことを計画－設計－実施へと図化し、現場で施工していく過程でいままで見えていなかったことが見えてくる。そのことによって、当初のデザインを修正したり、場合によっては変更したりしながら完成させるというものであるが、こうした考え方は公共的な施設にあっても都市づくりの分野にあっても大切なことである。

これらのことは、「県植物園」という一つの都市施設の計画－実施を通してであるが、今後の施設づくり・都市づくりの視点として大切なことである。

植物園を核とする都市づくり構想〔=越の森ミュージアム（仮称）〕



(2) 高齢化社会と鉄道、「県植物園」と鉄道
総合交通対策の面から見たの鉄道の役割

確実に到来する高齢化社会をどう豊かに生きるかは、これからの一番重要な課題である。安全で快適な交通機関としては鉄道の他になく、今後鉄道の役割はますます重要になってくる。また、秋葉丘陵全体を「県植物園」のフィールドとする植物園への交通機関としては、鉄道が最適である。特に既存のＪＲ信越線とＪＲ磐越西線を利用し、行き帰りの駅を変えることも可能であり、「県植物園」にとって、鉄道は欠くことの出来ない交通機関である。

そして、新潟都市圏の総合交通対策の面からも鉄道の役割を再評価し、植物園の入り口の位置にＪＲ信越線の新駅を設け、駅前地区に駐車場を計画することによって、ウィークデーは通勤者のパーク・アンド・ライドとして、休祭日は植物園の利用者から利用していただくことにより、地域の活性化を図ることとなる。

この他、「県植物園」の整備をとおして、また、上記の「植物園を核とした都市づくり（＝越の森ミュージアム（仮称）」構想をとおして、いろいろと新しい都市づくりに挑戦することが大切である。

おわりに――構想実現に向けて――

「景植物園」を核とする都市づくり構想は、植物園という一つの施設のあり方から都市づくりを提起しているが、この提起はハードな施設づくりにあっても、デザインの熟成と言われるような計画当初一実施設計ー施工といった、いろいろな段階で施設のあり方・都市づくりのあり方について追究し、必要のあるものはフィードバックしたり、計画の内容を豊かなものとする考えが必要である。

また、何と言っても、こうした施設づくり・都市づくりは、市民の参加、施設ごとの連携、魅力的で活気のある運営がなされて実現するものである。

紙数の関係で詳しくはふれることが出来なかったが今回提示した植物園を核とする都市づくりは、多くの共感を得てきており、その実現のためには、地道な調査や研究を蓄積することであり、人と人との結びつきを大切にしたい都市づくりに努めることあると考えている。全国各地から一度は行ってみたい、行かねばならないと言われるような植物園づくり・都市づくりを展望している。